

『集韻』の呉語的側面

望月眞澄

序言

集韻に関する音韻学的研究は、すこぶる少ないにもかかわらず、その言語的性格の究明が不問のままに、いざ漢語辞典編集の場となると盛んに利用されている。最近、中国で上梓の『漢語大字典』^①・『漢語大詞典』等も例外ではない。

②白濠洲「集韻声類考」(一九三二)・邱葵編『集韻研究』(一九七四)・龍宇純「從集韻反切看切韻系韻書反映的中古音」(一九八六)などの統計的研究はそれぞれ価値ある論考であることにまちがいはないが、このような一面的な統計的研究は却って集韻の本質解明には至らないことを発見し、その一端を拙稿「集韻札記」(一九九二)として触れたことがある。

集韻巻頭の「韻例」には、
凡經典字有教誦、先儒伝授各欲名家、今並論著以釋群説。

と、「經典にいくつかの読み方があるとき、それは先学が誇りをもって伝授した個性的なものであるから、今はそれら諸説を集めておいた。」と言っているものであり、また、集韻本文中にも、

(イ)〔証〕訟言相陷也。詩、孟賊内証。鄭康成説。

(ロ)〔虹〕潰也。詩、実虹小子。鄭康成説。

(イ)「遺」謙以下人也。詩、莫育下遺。鄭康成説。

等と、現に先儒の名を明記して、その学説としての「説」が示される。

潘重規『經典釈文韻編索引』などを得た今日にあつては、これらが即ち『經典釈文』からの援引であることが即座に確認できる。

上記の邸『集韻研究』では、この点、特に詳細な言及がある。

(ウ)「遺」の「説」が「句爲切」と与えられていることに度肝を抜かれることはあつてもこれが等韻学の体系中に平然と収まるからには統計的究明にのみ目を奪われているときには、何ら関心の対象とならない。

しかし、一旦、黄侃^⑦『集韻声類表』のような「表」の形式で集韻を等韻学的に観察するならば、そこに等韻学から見た、剰余の韻目とも言うべきものを容易に発見するに至るのである。しかし、黄侃に特別な論考があるわけではない。

ここでは黄侃式の「表」の作成を基礎にして一二の考察を進めるつもりである。

テキストの代表的なものとしては、

(1) 日本図書寮所蔵宋版

(2) 南宋孝宗淳熙十四年(一一八七)、田世卿安康金州軍刻本(北京図書館所蔵)

(3) 銭氏述古堂影鈔宋本(上海図書館所蔵)の三本がある。本論では(3)を用いる。

その上海図書館蔵、述古堂影宋鈔本『集韻』跋(一九八三)に顧廷龍は、

段茂堂注『説文』亦頗事采用、嘗曰「丁度等此書兼綜条貫、凡經史子集小学方言采摭殆備、……以是資博覽。而近古音、其用甚大」。

と述べるが、段茂堂の集韻利用は、今日の辞典編集場と同趣向のものであることが判る。經史子集小学をあまねく採用するほか、方言も採ると言う、この方言は、今日の方言学と同種のもものと見てよいのではないか。

とするならば、われわれはこの剰余の韻目に対して、方言の視点から、その由来する所をたずねることができ

るにちがいない。

集韻「韻例」が「撰集には、つとめて該広に従った」と述べるところが、經史子集の中国古典からの採用に限らず、時の北宋仁宗朝の方言採録にまで及んでいるのである。事実、

〔儂〕 奴冬切。我也。吳語。

〔來〕 龍都切。徠也。山東語。

〔晨〕 葱鄰切。旦也。關中語。

等と集韻自からが本文中に方言名を明記するものもある。

〔來〕は、最も標準的な平声哈韻のものほか、全部で五種類の発音が登録され、平声之韻にある、「陵之切」で示される「来る」の意味の発音は、あるいは福州音かも知れない。平声模韻の「來」は、「徠來」[lɛo lo] のことく発音する疊韻語の中での発音で、特に齊(山東)での発音なのであろう。「徠」にも「齊語」であると記している。方言名を明記しないままに、

〔街〕 居賤切。説文四通道也。

は標準的発音であるが、

〔街〕 均窺切。都邑中道。

の発音も示される。厦門の現代口語音は [gɔ] と合口要素を保つから、これらの祖形の可能性もある。

本稿では、集韻編集を建言した一人の鄭戩が、また編集にも参加し、その賈籍が蘇州であるところから、吳語、なかでも蘇州語的側面が集韻中に見られるのではないかとの期待で論を進めてみたい。

本論

一

拙稿「集韻札記」でも触れたが、集韻の諄韻の末尾に登録される、

〔天〕鐵因切〔t'ien〕は、広韻で 他前切〔t'en〕
 〔年〕禰因切〔n'ien〕 奴顛切〔nen〕
 〔顛〕典因切〔t'ien〕 都年切〔ten〕
 〔田〕地因切〔t'ien〕 徒年切〔den〕

のように、中古音先韻にもかかわらず、集韻では諄韻にも配置される。しかも、反切上字に用いられている鐵・典も同じ先韻相当韻であつて、このような慧琳式反切法は、集韻の反切用法では先儒の引用ではなく、集韻のオリジナルによるものである。そのためますますこれが鄭馥の意志を反映しているものと考えられる。

これら先韻、それに加えて仙韻は、現代蘇州語では共通して韻母〔ɿ〕で表われる。現代吳音では末尾音〔ɿ〕を脱落させてしまっているが、集韻の段階では〔ɿ〕ないしは〔ɿ〕の発音の存在していたことを暗示させるものである。

ここで「西」の音の集韻での配置を見ることにする。

〔西〕脂韻、相吞切、金方也。

〔西〕齊韻、先齊切、説文鳥在巢上象形。

日在西方而鳥棲、故因以為東西之西。

〔西〕先韻、蕭前切、金方也。

の三種が登録され、しかもその意味はすべて「にし」である。

〔西〕の音は「私」と同音、〔西〕の音は「先」と同音であるから、これを今、蘇州音で示すと

〔西〕私 〔西〕先

となり、調価もすべて同一のため、近似の聴覚印象を与えることになる。そのため集韻は異音としてこれらを登録しているのである。このことからすれば、先・仙韻の末尾音である〔ɿ〕脱落もすでに集韻時代はかなり進行していたのではあるまいか。

それにつけても顧みられるのは「洗」で、広韻にも、

(イ) 齊韻、先禮切。

(ロ) 統韻、蘇典切。

の二音が意味を異にするが登録されている。

この集韻「西」の(イ)のような類例が多数出現したとき初めて「(一)」脱落が異音としてではなく音韻としての意味を有することになるのであろうが、むしろこれは孤例である。

これと平行して、広韻では添韻であったものが集韻では侵韻にも沾韻にも重出するという例、

譜 天心切(侵)、他兼切(沾)

や、塩・侵韻重出の例があり、集韻段階では末尾音「(一)」「(二)」を保持したままでの吳音の混入の実態を示しているはずである。

二

集韻ではまた、平声山韻には中古等韻学から見るととき、歯頭音は含まれないはずであるが、第六小韻に
昨閑切 𦉳・𦉴・𦉵

が表われ、同時にあるべき正常な正歯二等音のグループが第四小韻に、

鉅山切 𦉶・𦉷・𦉸・𦉹・𦉺・𦉻・𦉼

と表われ、しかも、同義同字が重視している。

この重複は実は広韻に始まるが、広韻段階では最末尾小韻としてつましやかに忍び込んでいるに過ぎなかった。

もとより唐写本王仁昉『刊謬補缺切韻』では存在しなかったものである。

これは今日、蘇州音で、

(牀)母 ㄗ
 (從)母 ㄗ
 } → (邪)母 ㄗ

のように合流して〔ㄗ〕で示される音韻推移の底流を示す。

もっともこの歯頭音化現象はこの場合、平声で示されているだけで、山韻相当の上・去・入声には見られない。しかし、山韻の全二十四小韻中の配列位からみれば、第六位の高位に堂々と採録されているのである。

同様に半齒音、日母〔ㄗ〕の歯頭音化現象も指摘できる。

集韻の一等談韻には奇妙な半齒音、日母の混入があり、それが最末尾小韻として、

汝甘切―𧄀(以下五字)

が収められている。これらは広韻では咸撰三等塩韻に所屬していたものであり、このあるべき本籍には集韻でも収めた上、さらに重複してこの談韻に収められるのである。

この一見奇妙な現象も、現代蘇州音で、

(日)母 ㄗ → 読書音で (邪)母 ㄗ

のように邪母に合流する音韻推移の底流を想定し、かつ、これら舌上音・半齒音・正齒二三等の塩韻が、現代蘇州音で、例えば、

(染) 塩韻相当上声日母が〔ㄗ〕とあり、

(甘) 談韻 見母が〔ㄗ〕とあるように、談韻韻母〔ㄗ〕と合流する音韻推移の底流を反映しているものと解釈すれば、この日母の談韻配置も納得できる。

これと並行した現象に、広韻では塩韻に属する穿母の

(綵) ㄗ 處占切

は、集韻になると同義でありながら、

覃韻に、充含切と充母(正齒三等)

談韻に、充甘切と充母

塩韻に、蚩占切と徹母（舌上）

と三重出する例がある。

言うまでもなく一等覃・談韻の正齒三等音は、中古等韻学からすれば矛盾である。しかし、現代蘇州音ではこの正齒三等・舌上音はすべて合流して齒頭音化を果たし、清母の〔s〕と等しくなっている。

この現代蘇州音のような正齒三等音・舌上音の齒頭音化の底流のあることを前提とすれば、〔綫〕が呉音採録として覃・談韻に配置されている現象の意味がよく理解される。

前記、邱『集韻研究』の第七章結論、第三節「集韻切語之特徵」では、この点を、如談韻綫、他甘切、集韻又出充甘切。与大徐音説文綫充三切。声同、亦今變声也。

のように単に「旧音と今音のちがい」と述べるに過ぎない。

徐音とは徐鉉（九一六—九九一）の音の意味であり、徐鉉は江蘇省揚州の人。揚州音は北方音に属するが、蘇州とは運河も通じて呉音との親近感が存在していたのであろう。

三

河野六郎博士「吳方言における威撮一等重韻の扱い方について」では、その結論として

洪武正韻の覃・感・勸・合の四韻についてその反切の状況を見て来たが、この四韻に通じて言えることは、少くとも舌齒音字に関しては広韻の威撮一等重韻の別が一等；二等の対立で示されることである。そしてこの特色が現代呉方言の特徴と合致することは誠に注目すべきことである。言いかえれば、洪武正韻はその根柢を呉方言に置くことを具体的に物語るものである。

と述べ、また、

山撮の一・二等韻は、舌頭音字と齒頭音字は皆二等韻の所に入れられるている。

とも指摘している。

ここで集韻は、洪武正韻（一三七三、宋濂序）から溯ること三百三十余年とはいうものの、洪武正韻同様の傾向が見られないかどうか検討しておきたい。

集韻は山攝で、一等寒・二等刪・山（上声以下これに倣う）のごとく分韻され、広韻（一〇〇八）と隔ること三十年後の成書でもあるから広韻と同じ伝統的分韻法を採っている。洪武正韻はその点、寒・山の二分韻としてゐる。二等重韻が合流した現実に合わせてのである。同様に咸攝でも集韻は依然一等覃・談、二等咸・銜の分韻であるが、洪武正韻の方は、この四韻をすべて一つに収め覃韻と標出しているのである。

もし仮りに洪武正韻同様に、舌歯音に関して咸攝一等重韻の別が一等二等の対立として示されるならば、集韻もそっくりそのままその根柢を吳方言に置くことになろうが、序言でも触れたとおり、方言の一つとってみても多方言を採り込み、雑糅の集韻に明瞭な区別を見出すのはかなり困難であろう。しかし、雑糅は雑糅なるが故にまた、吳方言的性格も隠し持っているかも知れない。

調査の結果、（今、平声に限る）

○覃・咸重出例

諄①―那含切（覃） ・ 尼威切（咸）

馨②―〇含切（覃） ・ 師威切（咸）

○覃・銜重出例

慘③―〇甘切（覃） ・ 師銜切（銜）

と、覃韻舌歯音は河野説、吳音原則から言えば二等韻に出現しないはずのものが三例出現する。

では、談韻はどうか、

○談・咸重出例

鑿④・癩⑤―財甘切（談） ・ 〇咸切（咸）

馨||蘇甘切(談)・師咸切(威)

○談・銜重出例

藍||盧甘切(談)・力銜切(銜)

奮||財甘切(談)・鋤銜切(銜)

と、吳音原則から言つて談韻の二等韻重出の例が多いかというに、単にこの五例のみである。しかも「馨」のように覃・談兩韻に出てくる一種擬態語的な語であつてみれば、こういうものは元來、音の揺れがあつていいはずのものである。

では、寒・刪山重出例は、

檀||他干切(寒)・託山切(山)

爛||郎干切(寒)・離閑切(山)

姍・刪・獮・刪||

相干切(寒)・師姦切(○)

郎||相干切(寒)・師閑切(山)

の七例がある。これも吳音原則に照らしてみた場合、さしたる意味はない。ただし、牙喉音の場合には山・威擬いずれもこれほどの重出がないということが言えるだけである。

このように見てくると、河野説吳音原則は集韻の時代にはいまだ存在しなかつたと言つてもよいのではないかと考えられる。

ここで臆説を述べることを許してもらえらば、吳方言は、以下のごとくであつたと。すなわち、集韻時代には前述のように舌上音が齒頭音、時には舌頭音に、正齒二等音、正齒三等音が齒頭音に變じる現象、言い換えれば中舌的な性格からより前舌的性格に転換していた。

声母分布において一・二等の別を失つた山攝では、それが末尾音「ㄒ」という音的環境と相俟つて、この齒頭

音化は全韻に前舌音化を進め、河野説、

山攝の一・二等韻は、舌頭音字と齒頭音字は皆二等韻の所に入れられている。

状況に至ったのである。

威攝一等重韻は、單韻が中舌的、談韻がA変種の母音であつたとする説がこの場合も有効である。

威攝でも上述のように舌齒音は先ず前舌音化を進行させ、末尾音〔ㄨ〕が變じて〔ㄨ〕と合流すると前記山攝同様の推移を被つて、特にA変種の談韻にあつて、より前舌音化を進行させて、現代吳方音のような〔ㄨ〕へと向かつたのではないかと判断される。

結 語

以上、集韻という韻書は単に平面的に統計的に観察しただけではなかなかその真の姿を呈してくれないことを述べ、特に本稿では、その吳語的側面について、

一、先仙韻と諄韻の合流

二、舌上・正齒二三等韻の舌頭・齒頭音化

三、舌齒音の威・山一・二等分布

の三方面から検討を加えてみた。

そもそも集韻はその「韻例」が宣言するように、景祐四年（一〇三七）に太常博士直史館の宋祁と太常丞直史館の鄭戩とが、三十年前に成書の陳彭年・丘雍所定「広韻」が、繁略失当であると建言して、そのために編集されたものである。

北京図書館蔵本の牒文には、鄭戩らの奏上文が紹介されている。

昨奉差考校御試進士、竊見舉人詩賦多誤使音韻、……去留難定、有司論難、互執異同、上煩聖聰親賜裁定。蓋見行広韻、韻略所載疏漏、子注乖殊、……迷惑後生。欲乞朝廷差官重撰定広韻、使知適從。

鄭畿らは、「受験生の答案を見ていると誤りが多い。これが単純ミスならよいが、学説によって正否が分かれる時には最終的には皇帝の裁定を煩わすことになる。広韻・韻略も疏漏で、受験生に迷惑をかけている面もあるので朝廷に重ねて韻書の撰定を願ひ出て、受験生に適従すべき基準を知らせてあげたい。」と述べているのである。

このようにして編集された集韻であるが、見て来たとおり、方言も恣意的に挟まっております、言うならば、実に許容範囲の広い韻書となつてしまつた。

これは地方出身の受験生には有利に作用したはずである。

宋朝建国よりおよそ八十年、唐王朝までの貴族社会の支配から、広く有能な人材を必要とする社会へと成熟していた当時、蘇州出身の生民救済をモットーとする范仲淹（九八九—一〇五二）は仁宗に、官吏登用には縁故採用をさけるべきこと、高等文官試験には作詩のような貴族的教養に偏することなく政策論を重視すべきことなどを建言している^①。

商業活動の繁栄は都の汴京（開封）とそれを結ぶ揚州・蘇州・杭州などとの人的交流も増し、伝統的韻書、広韻に不満を抱く人士の方言感覚もこの集韻に投影していると考えられる。（一九九二・一〇・一四）

注

①『漢語大字典』（四川・湖北辞書出版社）は一九八六年から一九九〇年にかけて出版。『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社）

は、一九八八年から、一九九二年現在進行中。

②歴史語言研究所、集刊第三本、第二分

③発行者、台湾、卓少蘭

④中央研究院、歴史語言研究所、集刊五七本

⑤金沢大学文学部論集、文学科篇第十一号

⑥一九八三

⑦ 開明書店、一九二六

⑧ 『漢語方言字匯』北京大學中國語言文學系語言學教研室編。文字改革出版社（一九六二）による。

⑨ 大東文化大學『東洋研究』第53号（一九七九）

⑩ 錢鈔本にはこのような欠漏空白がかなりある。顧廷龍跋はこの点を「竊謂欠字欠画、審係原雕板片之漫漶、非印本紙張之殘損」と述べる。本稿では敢えて他本との校合はしないで論を進める。

⑪ 全宋文卷三七二「答手詔条陳十事」など。